

◆長後地区◆

人口 29,953人
世帯数 8,919世帯
自治会数 48自治会
昭和55年 6月1日現在



発行 藤沢市長後地区
社会福祉協議会
編集 藤沢市長後地区
社会福祉協議会 広報部
事務局 藤沢市長後513番地
長後市民センター内
責任者 小山 与四郎

55年度 長後社協 活動と予算

物から心の豊かさへ

古代より城や家は朽ちても人は千万年の歴史と今日の繁栄がある。人が家を造り豊かな利用は人であり心である。大切なのは人であり心である。大切なのは人であり心である。大切なのは人であり心である。

の要望もさることながら、「いまあるなかで、どう地域活動を推進させていくかが大切な考え方だ」と思う。福祉活動は人と人の関係が主軸になっている。今年度も更に「手作り」の活動をおすすめたい。わたしたちは必要最少人数の動員を考えるより、必要最大



親子もちつき大会

「座談会」

新旧会長長後の明日を語る

「福祉文化を住民の手で」



前会長 神山 政一



会長 小山 与四郎

司会 いよいよ八〇年代の幕が開き「地方の時代」は本番に入ったわけですが、神山さんにはその一線で副会長も含めて長い間地区社協の仕事を牽引していただき誠に有りがとうございました。そこで在職中一番印象に残っていることと言ったらどんな事ですか。神山 四二年から副会長七年会長を五年やらせてもらいましたが、企画部が出来たということですね。四六年社協の殻を脱皮していきこうじゃないかと企画部を作り外部から入ってもらったが「人を得れば良

いもの出来る」ことを感じました。特に企画部長の発想の良さと企画部の活動が今日藤沢市でも一目おかれるような社協になったと思います。長後独自の老人給食や地区善意銀行、生活貸付資金等も大変良いものだと思います。神山 小山会長さんに今まで神山会長の良き女房役としてご活躍いただいたわけですが戦後の長後住民と承っております。長後についてのご感想は？神山 四二年に長後の住民になったわけですが、心良くつきあえる住み良い土地だと思います。神山 これは渋谷町から藤沢市に合併する時はいろいろあったけれど、時間をかけて話し合うというのは渋谷町時代からの伝統ですね。小山 先覚者への思い遣りがあるが今日長後を育てあげたと思う

- 役員 会長 小山与四郎
副会長 秦野 勤
副会長 村上喜久子
会計 岸田 英敏
企画部長 鈴木 寛一
監事 塚越 治義
小菅 重行

役員紹介

- 一、地域住民の社協への理解を深める
二、各団体組織との連絡調整と活動の円滑化
三、リーダーの養成と研修

- 監事 藤田 勝
顧問 塚越 正治
担当常任理事 くらし、老人、青少年
○岸田英敏 安田貞夫
岡村彦市 湯本 正
小林 隆 川井正男
新倉 護 浅見勝三
広田勝男 関弥三郎
広田清 井上秀夫
村上喜久子 渡辺寿子
岸田和子
善意銀行
○秦野 勤 安田貞夫
塚越清五郎 杉山信雄
安田淳一 守谷礼良
清野修也
老人給食
○鈴木寛一 遠藤柳太郎
山崎加津子
障害者
○塚越治義 藤田 勝
大矢一夫 成田正勝
○は担当リーダー

活動費の内訳

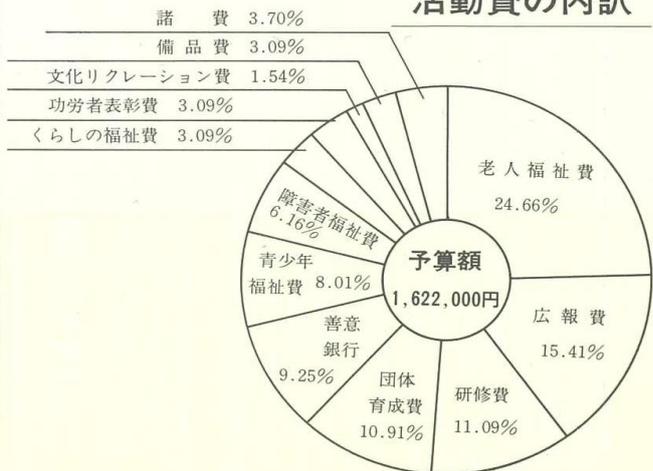


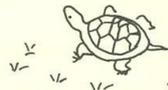
Table listing various activity fees: 諸費 3.70%, 備品費 3.09%, 文化リレーション費 1.54%, 功労者表彰費 3.09%, くらしの福祉費 3.09%

ので、そういう意味で敬意を表しながらお年寄りを大事に見守っていく責任があるんじゃないかと思えます。神山 神山さん月並みな言葉ですが、今後の長後社協に望むことは？神山 二八年に渋谷町に社協が出来てから、私が三代目の会長ですが機構の改革が出来、発展してきたことはうれいすね。福祉六法の内容はいろいろありますが、中でも老人福祉に力を入れてもらいたい。身障者との団体「ありの実会」のような形にもっていかなくてはいいか、ほかの地区からよく聞かれます。小山 そうですね、身障者の福祉に対する一つの方向づけが出来ましたから、これから発展させていきたいと思います。二面へつづく

長後体協の

あゆみ

野島一三



長後体協の発足について紹介するに当たって、成立について述べることになるが、戦後日本人の心の中によく平和が蘇えり、再建日本をめざし経済力の増強と共に人作りの行政方針が叫ばれてきた。特に昭和三十六年六月にスポーツ振興法が制定され、人作りの一環として日本国民の健康面の向上が世論として盛り上ってきた。この振興法の制定により、全国の地方行政の中にスポーツ振興方針が位置づけられたのである。

藤沢市に於ても国の施策を受けて、社会教育課の体育担当係の充実が図られ、体育推進方針が打ち出された。

長後も当時の長後小学校区内の住民を対象に体育振興の協会設立がいち早く行われ、初代会長として遠藤柳太郎氏が選出され、校区内のスポーツに深い理解と関心のある方々が執行部として、着々と向上に努力してきた。

昭和三十九年に世紀のスポーツの祭典といわれる第十八回世界オリンピック大会が東京で開催され、日本の国威を世界に示す祭典が行われた。その時の開会式を記念して全国に「体育の日」が制定されたのである。

長後体協もこの日を記念して長後地区レクリエーション大会を、長後地区の体育の最大行事として地区内の老若男女こぞで参加し盛大に行われたのである。

四十二年に長後小学校区の世帯数の急増に伴い富士見台小学

校が新設され、引続いて四十五年湘南台小学校の新設により地域は縮小されたが、長小校区内の人口急増は年毎に多くなった。このような状況では自然と各自治会の世帯数のアンバランスが生じ、その結果幾度か世帯人口の均衡について議論がなされ、改正案が出されたが、結局平均化は不可能であり現状の六プロックにより例年大会が行われている。

ここで特筆すべきは、当地区のレクリエーション大会の現状は、古い歴史の積み重ねにより住民層に根強くその意義が浸透し、企画運営に当たっても、指導委員、推進員を中心に各自治会長、体育部長が一九となって盛大に充実した内容のある大会が行われるようになったことである。

富士見台地区

体協の現況

鈴木寛一



長後市民センター内に三体協が、それぞれ思い思いの地域

に見合った計画を樹立し、後述の通り実施しております。要はお互いが連携プレーの出来る組織として地域の充実を図る考えなければ発展性はありませぬ。昔この地区が県下に誇る青年団活動の発祥地であったことは、知る人も少ないが……、それらを思い浮かべ青少年にもう一度夢を与えてみたいものです。しかし、スポーツは個人プレー、集団プレーそれぞれ指導者により如何にも伸びることが出来るもので、指導者の育成が大事であり自分も又良き指導者になりたいものです。それには日頃の心の触れ合いが必要で、一日にして成り立つものではありません。地域の皆々様、たゆまず努力を傾注し、明日への健康を築き、

スポーツの輪を拓げよう

スポーツ振興法が制定され、体協が誕生してから十九年を経過した訳ですが、体育施設や指導者の不足という隘路のため、十分な発展を遂げてきたとは云えない。

現状です。国民生活に社会体育の必要性が強く叫ばれている今日、地域の方々

湘南台体協の

あれこれ

諸節元吉



湘南台体協は、昭和四十九年湘南台小学校の創立と共に誕生して満六年を過ぎ、七年目を迎えております。初代会長長岸田菊之助氏をはじめ役員の方々の並々ならぬご努力により基礎造りが確立されましたので、私達五十四年度よりお引受けいたしま

して、何とか曲りなりにも運営することが出来ております。前役員の方々のお蔭であると深く感謝いたしておる次第です。現在湘南台地区は、十八自治会、二八七三世帯と増加の一途を辿っております。役員は会長一、副会長二、会計一、監事一、指導委員三、推進員四、総務七の計二十名で運営に当たっておりますが、昨年度より総務という役名で女子の方を六名お願いしております。理事会は、自治会長、体育部長、体協役員で構成し、役員会で原案を作り、理事会にかけ、その後行事を実行するという方式を採っております。体協予算は、五十五年度約一三六万円で、会費として各自治会より分担金(二世帯一五〇円)

の納入を頂き、その他よりのお助成金、寄付金等を充当しておりますが、会費四〇万円、助成金二二万円、寄付金五〇万円、その他二四万円ということで、寄付金の占める比重が大きい訳ですが、これは前会長時代に体協資金の一部に充当するため、体協主催で納涼盆踊り大会を行ったのが今日まで継続している次第です。この行事は、地域住民の親睦、青少年の健全育成の一助にもなり、一石二鳥の行事として益々盛大に行われ、湘南台地区の自慢の行事として定着しつつあります。

年間主要行事は十二計画されておりありますが、この他に湘南台小の体育館の開放管理、七、八月プール開放の管理当番も体協

四月	理事会、一般野球大会
五月	ソフトボール大会
六月	少年野球大会
七月	陸上競技記録会
七月	一般女子バレーボール大会
八月	一般男子バレーボール大会
八月	ブル大会
九月	市民総合体育大会
十月	ゲートボール大会
十月	レクリエーション大会
十一月	ゲートボール大会
十一月	ゲートボール大会
十一月	十月・十一月卓球教室
十二月	ふるさと祭り
二月	初詣歩行大会
三月	北部十三地区親睦研修会
三月	体力テスト

で引受けております。以上のような次第で、指導委員、推進員の方々は自分の仕事の合間にこれだけの奉仕をお願いするので、そのご苦勞は並々ならぬものであります。体協の原動力はこれらの方々であり、他の役員はこれらの方々が心置きなく活動出来るよう環境づくりに専念しなければならぬと心掛けております。



秋期レクリエーション大会風景

活動のようである。障害者に関してはピクニックや旅行、バスケット練習の手伝い、育児の送迎、託児など地域を越えたものや、障害者によるボランティアなど活動の幅と厚みを感じる。普段見る機会のない布の絵本は細かく工夫されていて参考になった。長後地区の方が先輩になつた会長宅からキビタスの家に移ってお年寄りが増え、配達もいれ四十人からになるという。そのうち十人はジャーでお届けし、お皿に移しながら話をしてくるが、昼食会にきた人達は民謡を唄ったりして楽しみたい方までゆつくりして居るという。ここに集つてお年寄りが「すみれ会」を作り季節毎の集いや盲人も一緒に積立て旅行を楽しみにしている。私達が訪ねた日はマッサージュの日で早くからお年寄りが来ていた。お年寄りに五百円でやってくるマッサージュ師のボランティアが毎週火曜日に来てくれていた。気軽にお茶を飲みながらボランティアも声をかけていた。このように気兼ねなく集える地域の拠点を羨しく思った。キビタスの会は常に学習の場や話し合いをもつていて、そして理想も大きい。今自分達で特別養護老人ホームを作ろうと話をすすめており、老人診療所も作りたいという。紹介しきれない活動や熱心な会員の話もさることながら会長である簡照子さんの明るく人を引きつける人柄と「ボランティアは楽しくなくてはね」という言葉が印象的だ。

レポート キビタスの会を訪ねて

梅雨の晴れ間の暑い日、横浜市鶴見区獅子ヶ谷にあるキビタスの会を訪れた。「キビタス」とはラテン語で「自覚した市民による理解と信頼に根ざす社会関係をいい、五〇年に開かれた教養セミナーで学んだ人達を中心になつてキビタスの会を作り、地域づくりの活動を始めたのだ」という。キビタスの家は地元の方々の協力を得て、昨年会で借金して作ったものである。庭には市電を利用したの図書館や心身障害児の自主訓練「エンゼルの会」で使う青いプールと遊具が目引く。借金の返済のために横浜大通り公園でバザールをやったり、老人給食会など年間計画はあるが、多くは各自が自分で関わる

